

鐵公司ノ名義ヲ有スル日支合辦会社ヲ設立シ滿鉄側ヨリハ
鐵田助ナルモノヲ代表トシテ社員タラシムルト同時ニ新
ニ支那ノ制定シタル鐵業條例ニ則リタル章程ヲ作りテ出願
スルニ至レリ

之ニ對シ滿洲ニ於ケル支那ノ地方官憲ハ前述セル如ク滿鉄
ト密接ナル關係アルカ故ニ相当好意ヲ以テ右出願ヲ北京中
央政府ニ取次キタル次第ナルモ北京中央政府ニ在テハ當時
鐵鐵國有ノ主義ヲ主唱スル所アリタルカ故ニ右請願ハ鐵務
監督署ヨリ却下セラレタリ、本件挫折ノ事情如斯次第ナル
カ故ニ此ノ交渉ハ最早之ヲ地方的性質ヲ帶フルモノト認メ
難クナリタルニ付大正四年二月下旬帝國政府ハ本件交渉ヲ
北京ニ移スヘク在支日置公使ニ訓令シタリ、然ルニ當時帝
國ト支那トノ間ニハ別ニ山東ニ關スル條約ニ關聯シテ滿蒙
ニ於ケル帝國ノ鐵業權ニ關スル條約ノ進行中ナレハ本件鞍
山店鐵鐵問題ハ之ヲ右條約解決如何ノ結果ヲ見ル迄延期シ
置クヲ可トスヘシトスル意見アリテ遂ニ本件ノ交渉ハ條約
ノ解決アル迄中止セラルルニ至レリ

其結果大正四年五月二十五日ノ日支間ノ取極(公文交換)
ニヨレハ遼陽縣ヨリ本溪縣ニ亘ル鞍山店一帶ノ鐵鐵ニ付テ

日宣ナリ

(三) 資本金ハ拾四万円

(四) 準拠法ハ章程第一条ニ於テ明カナリ次ノ如シ

「本公司ヲ中日合辦振興鐵鐵無限公司ト称ス但鐵業條
例確定以前ニ在テハ現行弁法ニ照シテ辦理スルモノト
ス」

查スルニ日本側代表者鐵田助ハ奉天滿鉄公所長代理ニシ
テ本公司ハ實ニ滿鉄其モノノ名義ヲ變更シテ成立シタルモ
ノニ外ナラス

三、諸問題

鞍山店鐵鐵其他ノ鐵鐵ニ關スル上述振興鐵鐵公司ノ採掘權
ハ大正四年ノ日支取極ニ基キテ生シタルモノナリト雖モ該
取極ヲ見ルトキハ海城方面ハ含マレサルモノナリ、然レト
モ帝國ノ解釈トシテハ該取極ノ指示スル所ハ單一概括的ニ
之ヲ為セルモノニシテ海城方面迄連亘セル鐵脈ハ總テ之ヲ
包含スルモノトセリト雖モ、後日紛議ヲ生シタル時ハ其点
一應考慮ヲ要スヘシ

而シテ本件振興鐵鐵公司ハ其實際ハ滿鉄ニ相違ナシ、然レ
トモ本来ノ法理上解釈ニ於テハ兩者劃然タル區別アルカ故

支那國政府ハ帝國臣民ノ試掘ヲ鐵業條例又ハ鐵業條例確定
前ニ在テハ現行弁法ニ準拠スル限り之ヲ許可スヘキコトト
ナレハ、茲ニ於テ鞍山店問題ハ解決セラレタル事トナリ、
今後ノ問題ハ愈々鞍山店鐵鐵經營ノ實現ノミトナレリ

前述取極ヲ案スル処右ハ一見鐵業權ハ帝國臣民ノミニ對シ
テモ允許サルヘキカ如シト雖モ在來外國人カ支那ニ於テ鐵
業ノ經營ヲ為ス場合ハ必ス合辦タルヲ要スルコト成リ居
リ別ニ國際的取極ノアルニ非レトモ鐵山ニ關スル合辦主義
ハ支那政府ノ一貫セル主張ニシテ諸外國側モ亦實際上一樣
ニ此主義ニ準拠シ居レル狀態ナルニ付帝國政府ハ前述取極
ノ文面ノ如何ニ不拘鞍山店鐵鐵ニ關シテモ日支合辦主義ニ
遵フコトトシ本件實行ニ付右ノ旨滿鉄ニ注意ヲ促シ置ケリ
而シテ右指令ニ基キ滿鉄ハ日支合辦ノ振興鐵鐵公司ヲ設立
シ出願シタル処大正五年四月十七日ニ至リ支那農商部ヨリ
本件日支合辦ノ鐵山採掘權ヲ許可スヘキ旨ヲ達セラレ本件
ハ茲ニ形式上落着スル運ヒニ至レルナリ

二、鐵鐵公司ノ組織

(一) 公司ハ中日合辦振興鐵鐵無限公司トス

(二) 日本側代表ハ日本商人鐵田助支那側代表支那商人秦

二次ノ点ハ最モ注意ヲ要ス

即チ滿鉄附屬地ニ於テハ帝國ノ行政權アルモ振興公司章程
第七條ニ基キ買収シタル用地ニハ行政權ナシ

然ルニ鐵山附近殊ニ立山ノ製鉄所附近一帶ノ買収地ニ於テ
ハ滿鉄ニ於テハ之ヲ鐵道附屬地ト同様ニ取扱フ事トシ他ノ
鐵道附屬地ニ於ケル如ク買収地ノ一部分ヲ貸下ヲ行ヒ、其
ノ地域ニ於テハ帝國ノ警察官ヲ派遣シテ取締ヲ為シ居レリ
殊ニ立山駅附近ニ於テハ常ニ多數ノ警官ヲ派シテ警察行政
ニ從ハシメ居タル処大正七年五月二十七日ヨリ在來ノ遼陽
警察署鞍山警察官吏派出所ヲ改メテ鞍山支署トシ着々巡查
ヲ増員シタリ

惟フニ此最後ノ点ハ最モ紛議ノ原因タルヘキカ如シ

四 本溪湖

六〇一 一月十三日

在奉天矢田總領事代理ヨリ
石井外務大臣宛

本溪湖鐵鐵公司中國側總辦更迭ニ關スル件

附屬書 右ニ關スル馬交渉員ヨリ矢田總領事代理宛通告

附 記 本溪湖煤鉄公司梗概

機密第六号

(二月二十日接受)

大正五年一月十三日

在奉天

總領事代理領事 矢田 七 太 郎 (印)

外務大臣男爵 石井菊次郎殿

客年九月張錫鑾当地離任後奉天官場ノ動搖ニ伴ヒ本溪湖煤鉄支那側總辦趙臣翼モ更迭スヘシトノ風説アリタルニヨリ本官ヨリ留任セシメ可然旨段將軍ヘ申入レ其快諾ヲ得タル次第ハ客年十月十日発拙電第一八八号ヲ以テ及稟報置候処本月六日附ヲ以テ馬交涉署長ヨリ別紙写ノ通り通告ノ次第有之翌七日上將軍往訪ノ砌將軍ヨリ曩ニ本官ニ対シ言明シ置キタルモ趙總辦ヨリ病氣ノ故ヲ以テ辞表ノ提出アリタリトテ右辞表ヲ示シ余白ニ將軍自身記入シタル回復ノ上ハ更ニ恩顧ヲ加ヘ重用スヘシ云々ノ内訓ヲ読聞セタルカ同日更ニ煤鉄公司顧問在当地大倉組代表者林幾太郎ニ就キ本件更迭ノ真相問質シタル処昨年末鞍山站鉄鉦問題ニ関シ当方面ニ出張シタル農工商部張鉦政司長本溪湖視察ノ際趙總辦ニ対シ同人力常ニ日本最負ニシテ支那側ノ利益ヲ強硬ニ主

張セサル廉ヲ以テ或一部ニ物議ヲ醸シ居ル由内話アリタル趣聞及ヒタルモ急遽同總辦ノ更迭ヲ見ルカ如キコト有之間敷ト考ヘ居タルニ突然右更迭ヲ承知シタル次第ナリトコトナリシカ其後又林ヨリ大倉組ニ於テ趙總辦ノ留任ヲ希望スルハ勿論ナルモ後任者既ニ決定セル以上其ノ人物ノ如何モ明カナラサルニ其ノ就任ニ就キ抗議シ之ヲ排斥スルハ徒ニ其惡感ヲ惹起スルニ止マリ好マシカラサルノミナラス趙自身モ之カ為メ却テ段將軍ノ反感ヲ惹起スルコトヲ虞レ官憲ノ干涉ヲ希望セサル由ニ付旁々本官ハ本月十二日林同伴ノ上段上將軍ニ面談シ煤鉄公司支那側總辦ノ更迭既ニ七八回ニ及ヒ其都度支那側下級ノ者マテモ更迭シ業務上不便不利尠カラサルモノアリタルカ幸ヒ趙總辦ハ日本側トノ折合モヨク從テ同公司ノ營業成績極メテ佳良ニシテ日支合辦事業ノ模範トモ目セラレ居ル有様ニシテ今次同總辦ノ離任ヲ見ントスルハ本官ノ大ニ遺憾トスル所ナルカ既ニ後任モ決定セルコトトテ別ニ抗議箇間敷コトヲ申出ルコトハ差控フヘキモ後任總辦ニシテ徒ニ日本側ノ計畫並ニ經營ニ異議ヲ挾ミ延テ事業ノ遷延ヲ見ルカ如キコトアリテハ折角鉦鉦ヲモ増設シ事業ノ擴張ヲ図リ居ル際商機ヲ失シ兩國側共ニ

損害ヲ見ルカ如キ事情ニ立至ルヘキニヨリ此点ニ就テハ後任總辦ニ能ク能ク注意アリタキ旨申入レタル処段ハ右ニ同意シ趙總辦ニ就テハ同公司カ事業ノ擴張ヲ図リ居ル際同人ノ老齡及健康ニ顧ミ之カ任ニ堪フヘキヤトノ懸念ハ北京方面ニ起リ居タル模様ナルカ今回同總辦カ病氣ノ故ヲ以テ辞意申出テタルコトトテ之ヲ聽許スル様取次キ置キタル次第ナリト述ヘ後任總辦王宰善ニハ当方申出ノ趣ヲ訓戒シ置クヘシト答ヘ當時將軍公署ニ居合セタル王宰善ヲ呼寄せ本官ニ紹介致候

右成行御參考迄及稟報候 敬具

本信写送附先 在支公使

(附屬書)

本溪湖煤鉄公司中国側總辦更迭ニ関シ馬交渉員ヨリ矢田總領事代理宛通告

第三三号

逕啓者奉

按憲段飭開掘本溪湖煤鉄公司總辦趙臣翼詳称竊臣翼自冬令以来偶感風寒致患喘嗽服藥多劑軫益加劇掘医者云非避風節勞不能奏効而公司宿舍係在山頂風尤峭厲又距辦公事務所二

里有余往返徒步寒非病軀所能勝任又未便頻煩請假致悞要公輾轉思維惟有呈請按台開去差使另行派員接充俾臣翼回省就醫一俟漸痊仍當詣前請派差使等情查趙總辦在差兩載有余尚資得力今既因病辭職自應准如所請俾得回省早為就医所遺總辦一差查有免往奉古任用王宰善堪以委任接充該員係前清舉人日本高等商業學校畢業生河南息縣新鄉縣知事歷充河南官銀局提調交涉局提調辦理福公司煤礦事宜焦作煤釐局總辦江西國稅庁坐辦於商學礦務極有經驗除飭委暨分行外合行飭仰該特派員知照並函致日本總領事查照等因奉此除電告島岡總辦外相応函致

貴代理總領事請煩查照為荷此致

大日本駐奉總領事矢田

外交部特派奉天交涉員 馬 延 亮

洪憲元年一月六日

(附 記)

(大正四年一月外務省調)

本溪湖煤鉄公司梗概

一名称 (定款第一条) (明治四十四年十月六日追加條款第一款)

商辦本溪湖煤鉄有限公司

一設立年月 (明治四十三年五月二十二日契約第一条)

明治四十三年五月二十二日合辦契約締結公司成立ス

(清国皇帝ノ批准ヲ経タリ)

(明治三十八年十二月関東都督府ハ大倉組ニ対シ軍用ノ目的ヲ以テ本溪湖炭坑ノ採掘認可ヲ与ヘタリ、後曲折ヲ経テ支那側ト大倉組トノ合辦経営トナレリ)

一目的 (定款第二条)

本溪湖炭鈹、廟児溝鉄鈹ノ採掘其他

一資本 (定款第五条) (原契約第三条及追加條款第二条)

元資本額 北洋銀二百萬元 (明治四十三年五月二十二日ノ契約)

第一回増資 北洋銀二百萬元 (明治四十四年十月六日ノ追加條款)

第二回増資 北洋銀三百萬元 (大正三年二月十日第三回株主会決議)

計 (資本総額) 北洋銀七百万元

払込済額 五百三十萬元

払込未済額 百七十萬元

(大正三年十二月支那側ニ於テ払込ヲ要シタル五十五萬元ハ大正三年十月十六日締結ノ大倉借款ノ金額ヲ以テ之カ払込ヲ了シタル筈)

一株数 (定款第八条) (原契約第二条及第三条並追加條款

一借款 (原契約第六条)

公司ハ日支兩國以外ノモノヨリ借債ヲ為スベカラズ

公司カ借債ヲ興ス必要アル場合ノ外ハ一切ノ財産ヲ他人ニ抵当ニ供スルヲ得ズ

一存立期間 (原契約第八条)

批准ノ日ヨリ三十ケ年トス

但シ商議ノ上期限ヲ延長スルコトヲ得惟タ満期後支那政府カ自辦ヲ欲スルトキハ政府ハ公平ノ代価ヲ以テ公司一切ノ財産ヲ買収シ公司ハ解散ス

一附、特権

本溪湖煤鉄公司製鉄工場ヲ距ル一百清里以内ニ於テ同種ノ工場ヲ設立セントスルモノアルトキハ公司ト協議シ其同意ヲ得タル上ニアラザレバ設立スルコトヲ得ズトナシ農工商部ノ認可ヲ得タリ

本溪湖城廠間輕便鉄道トノ關係

煤鉄公司ハ滿鉄ト該鉄道ヲ合辦ス、事業資金トシテ公司ハ十分ノ三ヲ出資ス但公司ハ其金額ヲ滿鉄ヨリ借スルコトヲ得

鉄道ノ監督ハ公司支那側總辦之ヲ兼任ス 以上

第二条)

總数七万株 (一株銀百円) 日支切半引受

支那側持株三万五千株、三百五十萬元

鈹株 (支那政府權利株) 三千五百株

三十五萬元

銀株 (募集株但現在ハ) 三万五千五百株

(支那政府ノ持株) 三百十五萬元

大倉側持株 三万五千株

三百五十萬元

(右鈹株ハ本溪湖炭鈹ニ対スル支那政府ノ權利株ニシテ廟児溝鉄鈹ハ公司ノ發達ノ為之ヲ鈹株トナサズ)

一株式 (定款第九条) (原契約第六条)

記名式 任意売買譲渡ヲ許サズ

但支那政府持銀株ハ之ヲ商株トナスコトヲ得

一利益配当 (定款第十一条) (原契約第四条)

鈹株銀株共普通年八分ノ利息ヲ附ス

利息ノ外尚純益アルトキハ株主ニ配当シ支那政府ヘ報効金ヲ出シ、及積立金トス

一役員 (定款第十四条) (原契約第五条)

督辦一名 奉天特派交渉員兼任

總辦二名 日支各一名

(欄外註記)

「定款トハ四十三年十二月二十一日付調印ノ公司總則細章ヲ云フ」

六〇二 七月四日 在奉天矢田總領事代理ヨリ
石井外務大臣宛 (電報)

本溪湖煤鉄公司ノ経営ヲ大倉組ニ一任スル意

向等張作霖談話報告ノ件

第二七八号

七月四日張作霖訪問ノ際作霖ハ本溪湖煤鉄公司ノ支那側持株ヲ引キ上ケ同公司ハ大倉組一己ノ経営ニ任セコノ出資金二五〇萬元ヲ以テ他ノ事業ニ投スル考ナリ夫レニ就テハ中村総裁ノ来奉ヲ俟チ貴領事ト三人ノ間ニ内密相談致シタシト云ヒ又米國領事ハ其後依然活動シ居リ兌換問題ノ際ニモ何時ニテモ救済スヘシト再三申出アリ次テ鮮銀借款ノ担保トナレル電燈廠ニ対スル機械ノ売掛代金六萬元余滞リ居ルトノ理由ニテ質問シ来レルコトアリト述ヘ又近頃日本側各方面ノ新聞ニ日支銀行其他ノ誤報伝ヘラル、為北京政府ニテ自分ト日本側トノ關係ニ付猜疑シ種々ノ名目ノ下ニ人ヲ派シ真意ヲ探リ居リ現ニ鮑貴卿本日再ヒ来奉スル筈ナリ尚

馬交涉署長モ段総理ニ対シ自分ト日本側トノ關係ニ付密告
シ居ル模様アリ云々ト内話セリ

北京へ電報セリ

事項九 日中合弁銀行奉天ニ設立計画ノ件

六〇三 五月十九日

在奉天矢田総領事代理ヨリ
石井外務大臣宛(電報)

奉天ノ中国銀行及交通銀行ノ小洋票兌換ニ関
スル日中覚書調印承認方ノ件

第二〇一号

貴電第六六号ニ関シ今回ハ小洋錢問題トハ多少事情ヲ異ニ
スルコトニテモアリ又将来融通ノ余地ヲ存シ置ク為メニハ
本官ト支那側トノ間ニ正式条件ノ取極メヲ為スコト得策ナ
ラスト存セラルルニ付商業會議所ヲシテ支那側ニ銀行代表
者トノ間ニ覚書ノ形ヲ以テ大要左記条件ヲ協定セシムルニ
止メ右覚書ハ今明日中ニ調印セシムル筈ニ付右様御承知ア
リタシ

(一)中国銀行及交通銀行ノ奉天支店ハ日本人ニ於テ一律洋一
万元ヅツ計二万元ノ兌換ニ応スルコト

(二)長春ニ於テ二銀行ノ内何レカカ兌換停止ヲ解除シタル場
合ニハ其解除シタル銀行ノ奉天支店ハ従来通り無制限兌
換ニ応スルコト

九 日中合弁銀行奉天ニ設立計画ノ件 六〇三 六〇四

(三)本協定ノ実行期間ハ五月二十二日ヨリ六月五日迄トスル

コト

北京へ電報セリ

六〇四 五月二十二日

在奉天矢田総領事代理ヨリ
石井外務大臣宛(電報)

中国及交通兩銀行五月二十二日ヨリ制限兌換
実行ノ件

第二〇六号

往電第二〇一号ニ関シ兌換制限協定ノ覚書ヲ本月二十日附
ヲ以テ中国交通兩銀行ヨリ我商業會議所ニ交付シ愈今二十
二日ヨリ制限兌換ヲ実行スル筈ナリ尚ホ当地ニ於ケル銀紙
ノ開キハ近来次第ニ多ク本月二十日一千元ニ付小票即チ一
元票ハ八九元大票即チ十元五十元等ハ五元位ニシテ中国交
通兩銀行以外ノ当地支那銀行ニテモ兌換請求者甚タ多ク関
係者ハ商務總會ニ集リ協議中ナリトノコトナレバ再ヒ洋錢
問題ヲ惹起スルニ至ルベシト察セラル